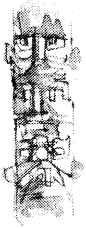
交差保育法の実践（その四）

宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導　大戸美也子



三　交差保育

2　交差保育への第一歩

秋の日の濃い朝もやは、晴天の徴候である。子どもたちも教師も、この冷たい朝にほっと一息ついたものである。交差保育がいよいよ展開するのだ。前日、両園の先生方が集まって、保育の時間、活動内容、先生方のチーム・ワークについて話し合った。**時間**は、往復ともに市内のバス路線を使うのでバスの時間にあわせて考えることにした。ザベリオ幼稚園の子どもたちは、近くの停留所から9時45分に出るバスに乗れば、10時には富田の大島停留所につく。そこから10分ほどで富田幼稚園なので、10時20分にはザベリオと富田の子どもが出合って作られる交差集団の活動がはじめられるであろう。帰りは富田幼稚園の真前から12時28分に出る市内行のバスにのれば、ザベリオの子どもたちは、他のクラスとも足並みそろえて帰園できる。正味2時間の交差保育が計画される。

この二時間の**活動内容**として(1)出合い　(2)園庭見物　(3)林に行って木の実拾い　(4)お弁当とあそび　(5)別れ　の五つにポイントをおくことにする。

また、活動に参加する**先生の数**は、富田幼稚園から三クラスの担任四人（年少組担当の宮沢先生は、お産を控えているため補助教諭一人がはいっている）と園長先生、ザベリオ幼稚園から担任一人と主事先生（カナダ人のシスター）の合計七人、その他ザベリオ幼稚園には大学の保育科の学生二人が参加観察兼補助役として参加することになる。七人の教師は、子どもたちが新しい活動に安心して参加でき、充実した一日をすごせるよ

うに交差集団の維持、発展に必要な教師の役割を検討し分担する。

そこで確認された、**教師の役割**は次の三つである。

●集団全体、活動全体を見通して活動の節を作っていく役割

●子どもの状況に即して活動の節をとらえ直し、活動の中味を作っていく役割

●活動の周辺にいる子どもをとらえ、集団活動に位置づけていく役割

この三つの機能を五つの活動内容と集団の性質の変化に対応させて、七人の先生で分担していくわけである。

今回は、交差保育に向かって歩みはじめたそれぞれの園のようす、子どもたちのようすをたどってみよう。

十月二十九日（金）

8時20分

富田幼稚園では、毎朝三つの方部に子どもたちが集まり、出勤する先生と一緒に登園する。それぞれの分担は、大島方部がタンポポ組の佐藤先生、富田・団地方部がレンゲ組の相楽先生、首路方部はスミレ組の補助教諭の熊田先生である。そして、宮沢先生が幼稚園でひとりで来る子どもたちを待っている。けさもいつもの通り、先生と子どもたちが道々おしゃべりしながらやってくる。

大島方部の子どもたち

「ザベリオの友だちはこの道あるいて幼稚園にくるのね」

「雨じゃなくてよかったね」

「ほんとうにくるの？」

富田方部の子どもたちも、話題はもっぱら今日くるザベリオの子どもたちのことである。いつもおとなしい女の子が

「ほんとうにきょうくるの？　先生、わたし夜、空みたらね、星いっぱいでてたからきょうはれるのわかってたよ」と心はずませて語る。幼稚園につくと、レンゲ組の女の子が先生を待ちかねていたように戸口に立って手まねきしながら大声でよびかける。

「先生、はやく手伝って！」

いそいでへやにはいってみると、女の子三人で折り紙を細かく切って首飾りを作っている。

「はやく、はやく、先生。ザベリオのお友だちに首飾りつけてやるのに、おおいそぎでつくっているの。わたし、スミレもタンポポもだれもいないとき、一ばんはやくきたんだよ。先生も紙きる人になって！」

「まあ、いいこと考えたのね。でも、間にあうかなあ——。先生紙きる人になるから、他のお友だちにも手伝ってもらったら？」三人の女児は一斉に外へ友だちをさそいに走っていく。

やがて、十人ほどの子どもがへやにやってくる。
「みんなのりでねばす（「はる」の意）人になって、先生もいそいで切るから」のりではる子どもの方が多いため紙がまにあわない。それをみかねてのりではっていた子どもが「先生！わたしもきる人になる」さらに、三～四人がきる人にまわり仕事を分担しながら、ひとりひとり夢中で製作活動を展開する。
富田幼稚園の他のクラスでは、先生とザベリオの友だちの話をしたり、園庭でいつものようにタイヤをころがしたり、青い自動車にのってあそんでいる。

そのころ、ザベリオ幼稚園では――
「ごきげんよう」とあいさつする子どもたちの声も一段と大きく元気に登園する。
S男が廊下に足をなげだしてうつむいている。
「どうしたのS君？」
「ハーモニカわすれてきたの」
今日、富田のお友だちにきかせてあげようと毎日一生懸命練習してきたので、すっかり落担しているのだ。
「そうだったの。おうちに電話してみましょうか？」
「ウン、おかあさんもってきてくれるかもしれない」ようやく明るい表情になって立ちあがる。

T夫は、ドアをあけるとカバンをつけたまま、まっすぐ地図と手紙のはってある掲示板のところへ行って、
「これは、レンゲ組のともだちがかいたんだよ。ここをこうまがるんだよね。ホラ!!」まわりでオルガンをひいたり、本をよんでいた子どもたちは、T夫にさそわれるように地図のまわりに集まってくる。
女児三、四人は、富田の友だちにプレゼントするカード作りに夢中である。昨日もカード作りをしたのだが、まだそのつづきがしたくてさっきから何枚もカードを作りつづけている。
出発までの時間、子どもたちは思い思いの活動をしながら、時々地図を見に行ったり、先生に時間をたずねたり、富田訪問への期待が活動のはしばしにあらわれているようだ。

さて、富田幼稚園レンゲ組の首飾り作りはますます盛んになってくる。細い紙を輪にして十数個つないで一つの首飾り。それが三十六人分必要なのだ。仕事を分担してスムースに仕事はすすめられているが、はたして時間まで間にあうか。先生は心配になる。そこで隣りのタンポポ組の佐藤先生のところへ応援をたのみに行く。
相楽「Aちゃんがゆうべから考えてきたことなんだけど、ザベリオのお友だちにプレゼントしようと思ってね、首飾り作り

ましょうっていうの。それでAちゃんは、朝一ばん早く幼稚園にきて一生懸命作っているんだけど、皆も手伝ってくれないかしら――」

登園して間もないころで、あそびを探している時なので子どたちは熱心に相楽先生の話に耳を傾け、早速反応を示す。

「先生！　ぼくらどこでやればいいの？」

相楽先生がレンゲ組を指し示すと、へやの中にいたほとんどの子どもがレンゲのへやへようすを見にいく。そして、レンゲのへやの熱気にあてられたように、

「先生、ぼくらも作る」という。

相楽「そう、ありがとう」佐藤「テーブルがもっとあるといいわね。机といすはこんできたら」タンポポから、机といすがはこびこまれ、切る人、はる人、材料をはこぶ人にすぐ分かれて製作活動がつづく。

9時15分　ザベリオ幼稚園きく組ではお集り。

今日はどんな日か、どのようにして富田幼稚園へ行くかをもう一度確認すると、

「バスにのって、地図をみながら行くの」子どもたちは一斉にこたえる。

「そうね。今日一日富田のお友だちと一しょに楽しくすごしましょうね」

バスの中での注意、今日一しょにすごす大学生のお姉さんの紹介を終えてから、お手洗いに行き、昼食のときのむ牛乳をカバンにつめて幼稚園の前に集合する。

富田幼稚園のレンゲ組では、レンゲとタンポポ（共に年長児）の子どもたちが協力して一心に製作中である。この活動を庭であそんでいる子どもたちや年少のスミレ組にも伝え、待つ活動をもりあげようと、佐藤先生はマイクで放送をはじめる。

「レンゲさんのおへやでザベリオのお友だちにプレゼントする首飾りを作っています。作りたい人はレンゲのへやにきてください。スミレさんもどうぞ」

作りたい子どもたちは、ハサミとノリをもって、レンゲに走ってやってくる。スミレ組からも四人ほど参加する。レンゲのへやはますます熱気がこもり破裂しそうなふんいきである。

9時35分　きく組の友だちは、主事のジーゼル先生や大学のお姉さんとともに幼稚園を出発する。

レンゲ組では、佐藤、相楽の二人の先生と子どもたちが三つどもえになって製作に没頭している。

富田幼稚園に向かうザベリオの子どもたち

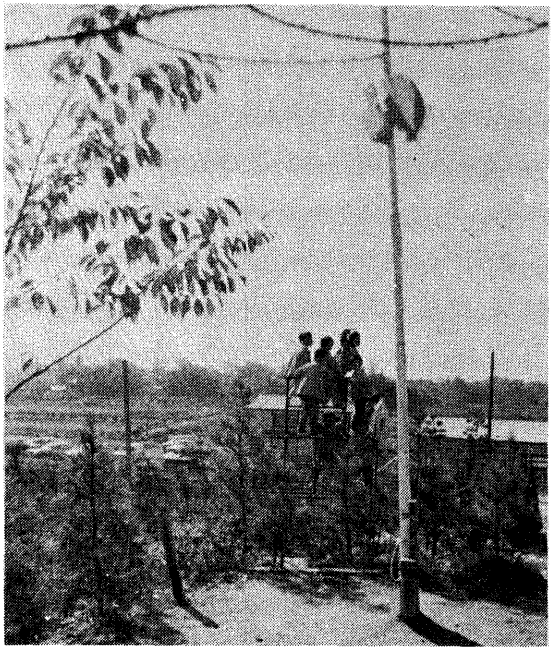
「先生、はやくきって！」
「ハーイ。いまきります」
「どのぐらいの長さがいいの？」
「自分の頭くぐらせてみて、いいなと思ったら輪につなげばいいんじゃあない」
「ここは、ピンクの色がないよ」
「ちょっと、さがしてくるわね」
「先生できた！」
「できたらあそこにおいてね」（ロッカーの上）別の先生がその言葉を受けて「ここですよ、ここにおいてください」

9時40分　バスの停留所に到着

バスがくるまで、カバンの中にはいっている木の実を入れる袋やハーモニカをのぞきこんでおしゃべりに忙しい。バスは定刻にやってくる。

9時45分　バスに乗車

「今ごろ、ザベリオのおともだち、バスに乗ったかもしれないよ」レンゲのへやでは相変らず首飾り製作に忙しい。輪つなぎは〝たなばた〟以来やることもなかったのに、どの子どもも手つきはなかなか巧みである。ここには、年長児のほとんどと



友だちをまつ富田の子どもたち

年少児が加わっているが、まるで一つのクラスのようによくチーム・ワークがとれている。また、ふだん、気のあわないリーダー的存在の男児が二人、偶然隣りあわせるがひとりが話しかけ、「これ、一しょにつないでみよう」「ウン」と協力している。二人の未完成品がたちまち一つの完成品に変わるよろこびを体験し、二人は互いに相手を見直したらしく最後まで二人の協同作業はつづく。

「今ごろバスの中かしら」先生の口から心配そうな、それでいて子どもを励ますつぶやきがもれてくる。

10時　大島停留所に到着

バスをおりて、二列に並び地図をみながら進行する。

「あっ竹やぶがあった」

「はしもある」

「しかくい田んぼってこれか」

「ほんとうだわ。地図にあったのとおんなじだわ」

「ほんとにたくさんあるなあ」

「あっ！　木のトンネルだ」

「きもちわるい」

「まがりかどだ」

「でも、とみたようちえんまだかな——」

10時10分　首飾りの数を数えていた佐藤先生

「三十六こできましたよ！　よかったわね。みんなありがとう。じゃあ、後片づけしましょう。残った紙や途中のものはどうしましょう」

相楽先生、いそいであき箱をみつけてきて「色紙はこの箱の中に入れてください」と箱を示す。タンポポ組の子どもたちは机といすをへやにもどす。

予定では、あと四、五分でザベリオの子どもたちが到着するはずなので、片づけを終えると、全員園庭に集まる。どの子どもたちも少し緊張したようす。時間が少しあるので、庭を散歩しながら、どこを案内しようかなど語り合う。しばらくまってもザベリオの人たちの姿が見えない。子どもたちは、ジャングルジムやたいこ橋にのぼって大島の方向をながめたり、へやに行って画用紙で望遠鏡を作ってきてのぞいたりする。しかし、一向にあらわれない。子どもたちも先生も心配になってくる。子どもたちは待ちくたびれてきたらしく、

「先生、きょう本当にくるの？」

「ちっともこないよ」

「先生のうそつき！」などといいはじめる。

はりつめた子どもの気もちをそのままの状態に長く保とうとすると、教師自身も次第にあせりを感じ、いらいらする気持ちを押えるのが大変である。

富田幼稚園中がいらいらしているそのころ、ザベリオの子どもたちは、富田幼稚園の方向とは反対の方向へどんどんすすんでいた。五、六分歩いて、すぐに見えるはずの園舎が見あたらないので、道をまちがえたらしいことに気づいたものの、人家もなくしばらくすすんで、一軒の農家が見つかったので聞いてみる。案のじょう、道を一本まちがえているという。子どもたちにも道をまちがえたことを伝え、Uターンしてもう一度お店で道を確かめてから、五分間ほど休みにする。予定よりも十分遅れた。子どもたちを歩かせた上、富田の子どもたちをまたせているので、先生はつらい気持ちになってくる。

富田幼稚園でも、しばらくしてザベリオの友だちが道にまよっていることが、バスに同乗していた人から伝えられ、佐藤先生が自転車にのって偵察に出かける。待ちきれず、思わず先生の自転車について走り出す子どももいる。ジャングルジムの上から「先生、みつけてきてね」と盛んに手をふる。

ザベリオの子どもたちは一休みして元気をとり戻すと再び歩きはじめる。すぐ別の橋と竹やぶが見えてくる。

「あっ、こっちの橋だったんだ!!」

橋をわたると、林の中に富田幼稚園の屋根がみえる。

「あっ、あの木のあるところだよ」

歓声がどっとあがる。この歓声は偵察に出た佐藤先生の耳にもとどき、ザベリオの子どもたちが、もう間近にいることが確認できたのですぐに幼稚園にひきかえす。

「ほんとにまがりかどだらけ」

「また、まがりかど」幼稚園の前の本屋敷という部落にはいると木の陰になってまた幼稚園が見えなくなる。

「幼稚園まだかなあ」

「もうすぐですよ」「富田の子どもたちは待ってますよ」と本屋敷にいる富田の父兄から声をかけられ、子どもも先生もまた勇気がでてくる。

一方、富田幼稚園では、近くまで友だちが来ていることがわかり一安心したものの今か今かとまちつづけている。率先して地図をかいた男児が「あの地図で、わからなかったのかなあ—」とがっかりしたようすなのである。

「よくわかるようにかいたのにね」

「あんまり曲がるからわからなくなったのかな」子どもも教師も意気消沈しそうなところへ、佐藤先生が息はずませて帰ってくる。

「今、きますよ!!」それと呼応するかのように、ジャングルジムにのぼって大島からの道を見つづけている子どもたちが、「きた！　きたぞ!!」とさけぶ。大島からの道に子どもたちの動く姿が見えはじめ、かん高い声が聞えてくる。富田の気分は一変して、再び緊張感がよみがえってくる。年少のスミレ組は幼稚園の入口で、年長児は道路まで出て迎えることになっているので、整列して坂を下っていくが、ザベリオの子どもたちの姿が、声が、次第にはっきりしてくるにつれ、みんな思わず、「オーイ」「オーイ」と手をふりながらかけ出す。

ザベリオの子どもたちにも富田の子どもたちの歓声、姿が目にはいってくる。

「ほら！　お友だちが坂のところに並んでまってますよ」

「オーイ」「オーイ」とさけんでみる。その声に「オーイ」という声がかえってくる。近づけば近づくほど声も顔も確かなものとなってくる。うれしい。「オーイ」「オーイ」とさけびながら、力いっぱい農道をかけ出す。待つ方も、手をふりとびあがる。先生も不安な気持ちからようやく解放されて、子どもとともに「オーイ」「オーイ」とさけびながらかけ出す。

友だちが自分たちに向かって近づいてくると、四、五人の子どもが急に先生のうしろにかくれてしまう。走ってくる子どもも近づいてみれば知らない顔ばかり。走ってきたものの近づけずにうしろから走ってくる先生の方を向いてしまう。一メートルぐらいの間隔をおいて、お互いにその先近づけずに立ったま

まもじもじしている。手紙に「ぼくははずかしがりやだから、かくれています」と書いた男児は「どうしよう。やっぱりかくれているかな？　どうしよう」とつぶやきながら前に行ったり、うしろへ行ったりする。

ザベリオ幼稚園の最後からついてきた主事のジーゼル先生が近づいてくると、富田の子どもたちはびっくりして

「あっガイジンがきた。オッカネー、ニゲッペ」

「オッカネー」と門の方へ走っていく。

入口で、富田の子どもとザベリオの子どもが握手して手をつないで坂をあがっていくことになっていたが、手をつないだのは最初の二、三組だけで、道の両端に平行してあるく。

園舎の前の広場に全員が到着する。ザベリオの子どもたちは木のたくさんある園庭や新しい友だちに見とれて静かにしているが、富田の子どもたちはとんだり、はねたり、「キャーッ」と奇声を発したり非常に興奮している。しかしこれらの表現のどれにも、心から友だちを歓迎している子どもの姿があふれている。

解説

交差集団の成立以前に、それに向けてそれぞれの集団がどのような活動を展開するかによって、作られる交差集団の性質は異なってくる。今回は、一方が他方へ出向くという形をとったため、一方は「進む」活動が、他方は「待つ」活動が、交差集団成立前の中心的活動となった。どういう「進む活動」をし、どういう「待つ活動」をするかは、交差集団の基盤のおさえ方でさまざまな可能性が考えられる。今回は、バスにのる、地図を見ながら歩く「進む活動」、プレゼントの首飾り作りの「待つ活動」が展開したのである。

また、この段階で大切なもう一つのことは、作られる交差集団をとらえて動く教師のチーム・ワークの検討である。特に、富田では全園合同の活動が予想されるのであるから、他集団のはいる前に合同の活動が用意されて次の活動にそなえられる必要があった。今回は、レンゲ組の先生が軸になって、タンポポ、スミレ組合同の製作活動が展開し、次の合同活動のよいウォーミング・アップになったと考えられる。さらに、この段階から二園の活動を統合的にとらえる教師が存在したなら、道にまよって双方が「待つ活動」「進む活動」が停滞する時は短縮され、これを発展的に位置づけることも可能であったと考えられる。

（つづく）